

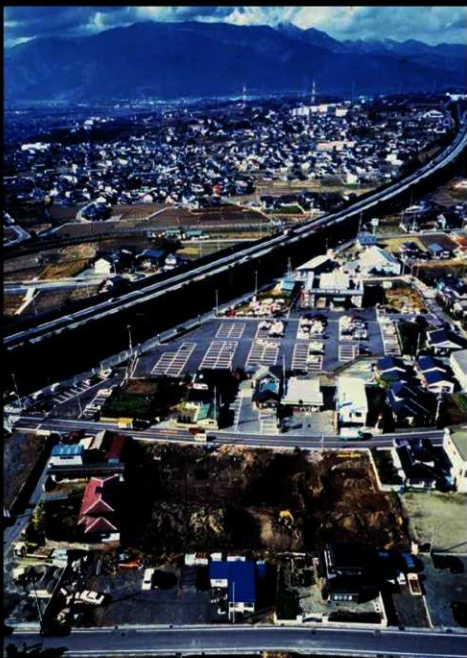
－ 山梨県を代表する弥生時代の遺跡 －



金かね の尾お 遺跡



その名は…



金の尾

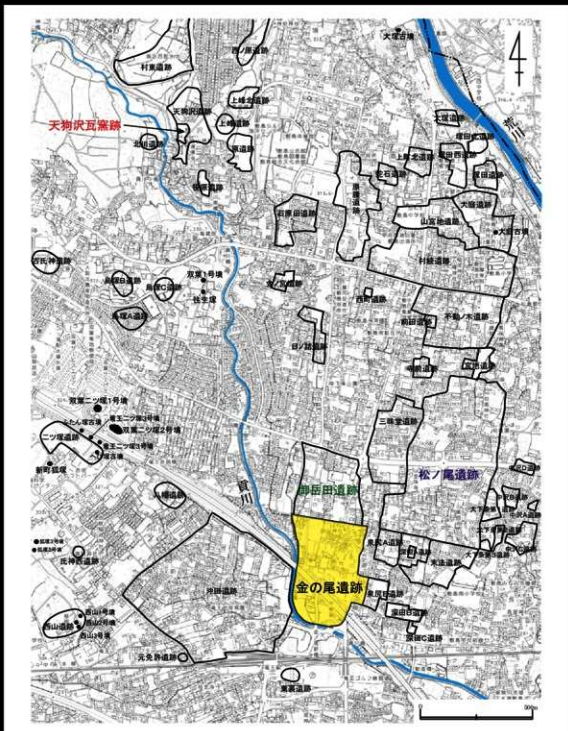
金の尾遺跡は、中央自動車道の建設に伴い昭和五十二年（一九七七）に発見されました。甲斐市はもとより、山梨県を代表する弥生時代の遺跡です。

遺跡が立地する甲斐市大下条字金ノ尾には、荒川や貢川によってつくられた微高地が広がっており、金の尾遺跡はこの微高地の上に立地しています。

これまで九回にわたる本調査が行われましたが、前述の中央自動車道建設によって行われた発掘調査が、規模や成果ともに最も充実しています。調査の結果、弥生時代後期（今から約一八〇〇年前）の集落と墓域が見つかり、山梨県の弥生時代研究が大きく進展する契機となりました。

その後の調査で、現在の中央道部分が集落、中央道から北側が墓域であることが明確になりました。また、集落を囲むように掘られた溝や、中央道部分以外からも集落が見つかり、遺跡が発見された当初よりも、集落が広範囲に広がっていることも明らかになっています。

遺跡があふれる地

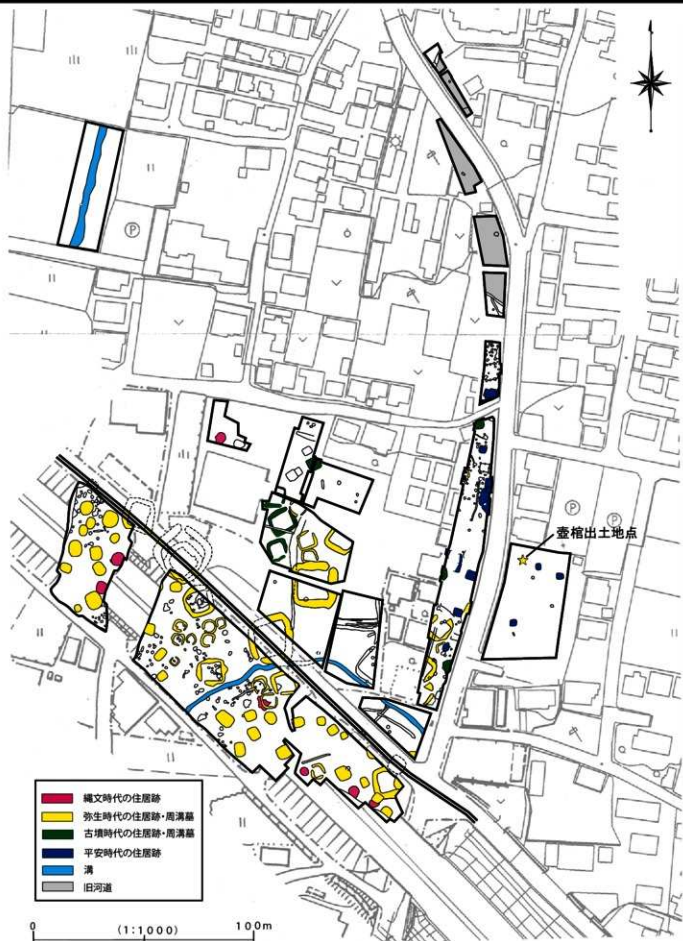


金の尾遺跡と周辺の遺跡

上図は金の尾遺跡の周辺地図です。周辺は金の尾遺跡だけでなく、多くの遺跡があることがわかります。代表的な遺跡として、古墳時代の管玉の未製品が出土した御岳田遺跡、平安時代の銅で造られた小さな仏像が出土した松ノ尾遺跡、奈良時代の瓦や須恵器を焼いた窯跡の天狗沢瓦窯跡など、金の尾遺跡にも匹敵する著名な遺跡が存在します。

では、これらの遺跡はどのような場所に立地しているのでしょうか。遺跡がひろがる甲斐市大下条・中下条・島上条地区は、荒川や真川によってつくられた扇状地です。なかなか気づきにくいのですが、この扇状地上には東と西に二本のわずかな起伏（微高地）が存在します。この微高地には、先ほどの遺跡をはじめ、多くの遺跡が存在しています。金の尾遺跡はそのうち西側の微高地に立地しています。

これが金の尾ムラだ！



集落を採る



第1次調査で確認された集落跡

大きく掘り込んである部分が住居跡。写真奥に見えるコンクリートは中央道の橋脚部分。



集落の西と南には真川が流れている（第1次調査）

これまでの調査で見つかった住居跡(時期別)

縄文時代(前期末~中期)	9軒
弥生時代後期	33軒
弥生時代末葉	1軒
古墳時代初頭(3世紀後半)	1軒
古墳時代前期(4世紀末~5世紀初頭)	2軒
古墳時代中期(5世紀中ごろ)	1軒
古墳時代後期(6世紀後半)	2軒
平安時代中期(9世紀後半)	6軒
平安時代中期(10世紀前半)	13軒
時期不明(平安か)	3軒
合計	71軒

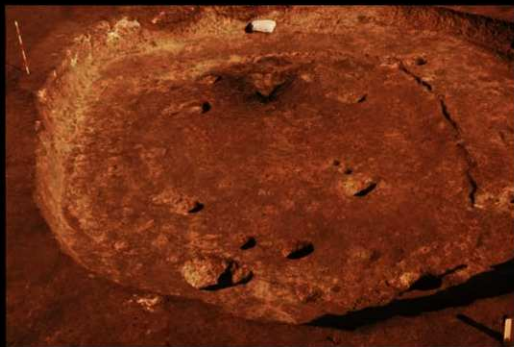
金の尾遺跡は、昭和五十二年（一九七七）の発見以来、九回の発掘調査が行われました。いったいどんなことがわかったのでしょうか。まずは金の尾遺跡に住んでいた人々の家を見てみましょう。

人々が住んでいた家（住居）の跡が、合計七十一軒見つかっていきます。時期別の内訳は表のとおりですが、弥生時代後期の住居跡の数が突出して多いことが一目でわかります。続いて、平安時代中期が続きます。これらことから、金の尾遺跡は弥生・平安の各時期に集落としての機能が集中しているといえます。

ほかにも、縄文時代の住居跡や、古墳時代の住居跡が見つかっていることから、断続的にはありますが、この地域に繰り返し人々が住んでいたことがわかります。

時代や人が変わっても、住みやすい土地だったのでしょう。

弥生時代の お宅拝見



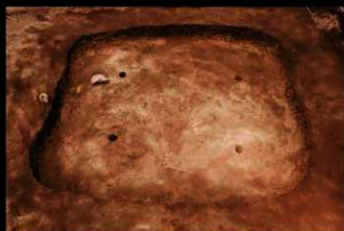
29号住居跡（第1次調査）

もともとの住居は長軸が約4.5mでしたが、拡張後の長軸は約7.5mと大きくなっています。家族が増えて手狭になり、家を大きくしたのでしょうか。



33号住居跡（第1次調査）

隅が丸く、やや胴が張った長方形の家です。柱穴のほか炉・出入口のはしご穴（写真右手）などが確認できます。



14号住居跡（第1次調査）

隅が丸い一辺約4.5mの方形の家です。4つの柱穴のあとが、床面にきれいに残っています。



炭化材の出土状況



炭化材を除去したあと

16号住居跡（第1次調査）

このお宅は火事で焼けたお宅です。床には焼けた木材や炭化した米粒が残っていました。調査の結果、不慮の火災によって燃えてしまった家ではなく、儀礼的な行事を経て「家に火を放った」と考えられています。

墓地を探る



周溝墓群（第4次調査）

溝で区画されている部分がお墓。遺骸を埋葬したであろう部分は、後世にけずられてなくなっています。周溝墓ごとに大きさが違うことがよくわかる写真です。



お墓の周りの溝（周溝）の調査風景
（第4次調査）



5号周溝墓（第4次調査）
一辺が約20mの大型周溝墓です。

これまでの調査で見つかった周溝墓（時期別）

時期 形	弥生時代 後期	古墳時代 前期	合計
方形	25	3	28
円形	2	0	2
合計	27	3	30

周溝墓って？

ひとことでは言うならば、溝で区画された弥生時代から古墳時代にかけてのお墓です。溝の形によって「方形周溝墓」や「円形周溝墓」と呼ばれます。このお墓は、弥生時代前期には近畿・東海地方などで見られるようになり、弥生時代中期ころには南関東まで広がります。溝を掘って区画することなどから、単純な埋葬より手が込んだ埋葬であることが特徴です。

金の尾遺跡の周溝墓



第1次調査で発見された周溝墓群
方形に区画されたもの、円形に区画されたものがはっきりとわかります。

金の尾遺跡の周溝墓を読み解くキーワードは、①広域交流の最前線であること、②集団の統合がみられること、③墓制の転換にみえる新しいイデオロギーの展開、この3つです。

この時期には列島各地の人々がこれまでより高い頻度で動き回るようになり、古墳時代に向けて広域交流が活発化していきます。金の尾遺跡は中部山岳における広域交流センターのひとつです。それまで山梨県内は、静岡県域とのつながりが強い人と長野県域とのつながりが強い人の2グループがあったと考えられています。



12号周溝墓
(第1次調査)



10号周溝墓
(第1次調査)

金の尾遺跡の周溝墓ではこれら2グループがまとまって墓地を形成しており、集団が統合して行く様子が見られます。

また、金の尾遺跡の周溝墓は甲府盆地の中では最古のもので、それまでの墓制から新しい周溝墓への変化は、背景に当時の人々の社会構造や精神面など様々な部分で変化があったと考えられます。

これらから、金の尾遺跡の周溝墓は、山梨県だけでなく東日本全体の弥生時代から古墳時代への転換を見つめるうえで手がかりを提供してくれる重要なものなのです。

壺棺

つぼかん



第5次調査で出土した壺棺

発掘調査時の様子



フタをあげると…

◀ 壺の底には、土が約7cmの厚さで堆積していました



壺（つぼ）の棺（ひつぎ）で、「壺棺（つぼかん）」と読みます。平成八年（一九九六）に行われた五回目発掘調査で出土した土器です。置いた時に安定するように、壺棺の下には小石が敷きつめられていました。

壺棺は壺とフタに分けられますが、フタは専用で作られたものではなく、別の土器の底を利用して作られています。また、壺もフタがうまくかぶさるように上部を欠いています。

フタをあげると、底には土が堆積しており、肉眼観察で小さな骨のかけらと思われるものが見つけられました。また、土の科学分析調査を行ったところ、動物遺体が納められていた可能性がわかりました。

壺棺の大きさから、大人の遺骸をそのまま納棺するのは難しいため、乳幼児を葬ったもの、または大人の遺骸を一度土中に埋めて骨だけにし、それを改めて壺棺に納めた可能性があります。

溝のナゾ



第6次調査で確認された大きな溝
集落を囲む「環濠（かんごう）」なのか、それとも水路なのか。



第6次調査で確認された溝の断面
溝底からは弥生土器のかけらが出土しました。写真の土器は溝の上層から出土した古墳時代初頭の土器です。



集落と墓域を分ける溝（第1次調査）

金の尾遺跡には、二つの特徴的な溝があります。一つは中央道部分を調査した第1次調査で発見された溝です。この溝は、第1次調査では集落を分ける溝とされてきました。その後の調査で、この溝の続きが確認されると新たなことがわかりました。この溝の北側では周溝墓は見つかりましたが、住居跡は見つかりませんでした。このことから、「集落と墓域を分ける溝」ということが明らかになりました。

もう一つは集落の西側にある長く大きな溝です。発掘調査で確認された長さは約五十六メートル、最大幅は約二・五メートル、溝の最も深い部分は約一・五メートルありました。後世の水田開発によって溝の上層部がけずられてしまい、浅くなっている部分もありましたが、溝がつくられた当時の深さは、さきに述べたとおり一・五メートル程度であったと思われます。発掘調査報告書では「環濠」としていますが、その後の調査によって水路である可能性も浮上しています。はたして…。

金の尾コレクション

数々の優品を

ごらんあれ!



金の尾遺跡出土 弥生土器



撮影：小川 忠雄

山梨県内最古のガラス玉

◀ 長野県北部地域の影響を受けた土器



口縁（こうえん）部に施された波状の文様が、この土器の特徴の一つです（楕描波状文）。

◀ 静岡県域の影響を受けた土器



イチジクのような、しもぶくれした胴部が特徴です。



石の矢じり（磨製石鏃）

◀ 長野・静岡二つの地域の特徴が混ざった土器



金の尾 穴あき土器3兄弟



口縁（こうえん）部をクルッと折り返してあります。



楕描文（くしがきもん）が施されています。

弥生時代以外も
充実しています！

その他の時代の調査成果

縄文時代

最初の金の尾ムラ



13号住居跡（第1次調査）

中央の石囲いは煮炊きを行った「炉（ろ）」、周りの穴は柱穴です。弥生時代の住居跡と比べると、柱穴が大きいことがわかります。



黒曜石でつくられた矢じり（石鏃）



53号土坑（第1次調査）

穴の底から石棒、石皿が出土している。いったいどのような意味をこめてうめたのでしょうか。

▶ 拡大すると、黒曜石がガラス質の石であることがよくわかります。と思います。



出土土器

今から約4500年前（縄文時代中期）の土器。左から第7次・第4次・第8次調査で出土した土器。

急に閑散とした
古墳時代



火事で焼けた住居（第4次調査 1号住居跡）
一辺が約5.5メートルの住居跡です。家の柱に使われていたであろう木材が炭になって、床一面にひろがっていました。火事のあと片付けをしなかったのか、意図的にそのままにしていたのか…



土坑（穴）に土器が埋まっていた状況
（第4次調査 15号土坑）



火事で焼けた住居から出土した土器と炭
（第4次調査 1号住居跡）



古墳時代の金の尾ムラに住んでいた人々は少ないですが、住居跡や溝からは、豊富な遺物が出土しています。



溝から出土した土器

再び人口が増えた 平安時代



平安時代の住居跡にあるカマド

カマドのまわりには、平安時代の土器である「土師器（はじき）」が無造作に転がっています。



平安時代の住居跡（第8次調査）

住居の奥壁やや右側にカマドがあります。



これらは平安時代の土器です。大きさや用途によって、**坏（つき）**や**皿**などに分けられます。中には墨や線で文字などが書かれた土器もあります。



調査をしていると、右の写真のようなお墓を発見することがあります。この方は頭を西に向け、膝を曲げた状態で眠っていました。棺はなく、地面に直接埋葬されています。

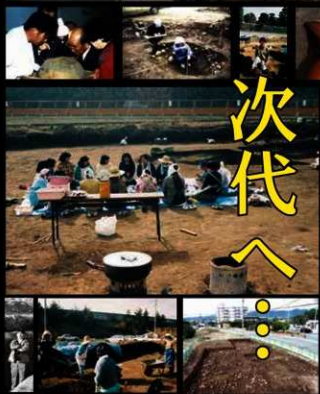


番外 中世



遺跡の記憶は

次代へ



まとめ

いかがでしたでしょうか。金の尾遺跡は、弥生時代の集落を探る上で重要な資料がたくさんあることが、おわかりいただけたと思います。この遺跡の発見によって山梨県の弥生時代研究が進んだと言っても、けつして過言ではありません。今後も新たな事実が、少しずつ時間をかけて明らかになっていくことでしょう。

ところで、弥生時代といえば弥生土器のほかにも、もう一つ（教科書的に）重要なことがあります。それは「稲作」です。金の尾遺跡では、住居跡から炭化したお米は見つかっていますが、肝心の水田跡が見つかっていません。当時の人々は水田を作らなかつたのでしょうか。それとも後世の開発や災害によってなくなつてしまったのでしょうか。そういったことも、少しずつ時間をかけて明らかになっていくことでしょう。

最後になりましたが、今までの調査にご協力・ご理解いただいたすべての皆様に、心より感謝申し上げます。



山梨県を代表する弥生時代の遺跡

金の尾遺跡

甲斐市教育委員会

発行日 2017年10月14日
編集・発行 甲斐市教育委員会
〒100-0192
山梨県甲斐市篠原 2610
印刷・製本 株式会社 峽南堂印刷所

主催：甲斐市・甲斐市教育委員会・一般社団法人自治総合センター 共催：山梨県考古学協会 後援：総務省
第1次調査の写真提供：山梨県立考古博物館 遺跡復原イラスト：黒田美和子
※この冊子は全国モーターボート競走施行者協議会からの拠出金を受けて作成したものです。